おふとんぱらだいす。PRESENTS

南三陸より

報道では見えない現地の今

2011年3月11日に発生した東日本大震災から4年が経過し、被災地の様子がマスメディアに取り上げられることは日に日に少なくなっています。しかし、現地の復興はまだ始まったばかりで、思うように進んでいない様子もうかがえます。

本書は2014年5月に宮城県石巻市・南三陸町・気仙沼市を訪れた際の様子をまとめたものです。写真と地元の方々から伺った話を交えながら、当時の現地の様子をなるべく忠実に伝えたいと考えています。この本を通して、少しでも東北の実情を感じ取ってもらえれば幸いです。

取材に際しまして、貴重なお話を聞かせてくださった現地の語り部の皆様に厚くお礼申し上げます。

▲南三陸町志津川の高野会館から防災対策庁舎方向を見下ろす

●取材で訪れた施設・地域

○石巻市
大川小学校

○南三陸町
防災対策庁舎
高野会館
小野花匠園

○気仙沼市
小泉小学校
気仙沼向陽高等学校
大谷海岸駅

石巻市

石巻市は宮城県北東部を代表する、漁業と工業で栄える都市です。震災で最大8.6mの津波が街を襲い、市内の13％が浸水、3000人以上の死者と400人以上の行方不明者を出しました。早期に市内の製紙工場や石ノ森萬画館が復旧するなど、産業や観光に前向きな兆しが見られます。

●大川小学校

石巻市釜谷地区の北上川沿いにあった大川小学校は、全校児童108人のうち74人が死亡・行方不明となった現場です。学校管理下では被災地で最大の被害となり、震災後の報道で、津波に気づきにくい地理的要因や避難マニュアルの不備、そして地震から津波が児童を襲うまでの教職員らの対応などが指摘され、世間から大きな関心を集めました。今もなお校舎の保存か撤去かで意見が分かれています。

私が訪れた時にはまだ校舎は当時のまま残されていました。校舎内外の瓦礫はきれいに撤去され、建物の中はガランとしていました。鉄筋コンクリート製の校舎は形こそとどめていましたが、至る所に津波の漂流物によって傷つけられた痕跡が見られました。校舎の間を橋渡しでつないでいた渡り廊下は津波で支柱からなぎ倒され、今もその場に横たわっていました。津波によって土台のみに剥がされた体育館は、かろうじてそこが倉庫やステージの跡だったと分かる程度でした。そばに卒業制作で描かれた壁画だけが鮮やかなまま残されていたのが印象的でした。周辺道路の整備は進んでいますが、集落の復旧は未だ完全ではない様子でした。

▲大川小学校校舎一望

▲体育館跡

▲壁面を破壊された校舎

▼体育館そばに残された壁画

▼支柱から崩れた渡り廊下

南三陸町

リアス式海岸で知られる南三陸町は、震災により死者600人以上、行方不明者200人以上の被害を受け、主要産業である農林水産業も打撃を受けました。現在は土地の嵩上げや高台移転が行われていますが、依然として街中には震災の影響が色濃く残されています。

●防災対策庁舎

南三陸町志津川地区にあった行政庁舎3施設のうち、震災で唯一残った建物です。鉄骨造りの3階建ての建物は、屋上階まで水に浸かり、逃げ場所を失った住民らが命を落とした悲劇の現場として、繰り返しマスメディアに取り上げられた場所です。この建物の2階で最後まで防災無線放送を続けた女性職員の逸話が今でも語り継がれています。

こちらも大川小学校と同じく、人為的な判断ミスから犠牲者が膨らんでしまった現場であり、保存か解体かで長年街の意見が揺れています。もともと私が訪れた2014年には解体されている方針でしたが、現在も議論は平行線をたどっています。

現場にはひっきりなしに手を合わせる人々が訪れ、志津川地区に残された数少ない震災遺構になっています。わずかな生存者がしがみついて助かった屋上アンテナや非常階段の手すりも当時のまま残されています。この建物が建設された当時、地元住民からはチリ地震津波の教訓から高層ビルにすることを提言していたそうですが、結果的に現在の形になり、犠牲者を増やす原因になってしまったことが非常に悔やまれます。

▲夕日に佇む防災対策庁舎

▲そばの庁舎は跡形もなく流された

▼野ざらしの鉄骨が津波の被害を物語る

▼玄関跡には千羽鶴が捧げられていた

●高野会館

防災対策庁舎から徒歩3分ほどのところにある結婚式場「高野会館」では、震災当日に高齢者芸能発表会が行われていました。地震後パニックになったお年寄りを、会館の支配人らが建物の上部に避難するよう呼びかけ、当時建物内にいた約330人全員が救助されました。防災対策庁舎よりも海側にあるかつ、高齢者が多数を占めていたにも関わらず、全員が生還した背景には、支配人の正しい判断と建物が4階建てであったことが考えられます。

建物を所有する阿部長商店はすでに震災遺構として保存することを決めており、私も運よく許可を得て内部を見学させてもらうことが出来ました。津波から逃れ避難したお年寄りが一晩を明かしたという屋上からは、一面が更地になった志津川地区が見渡せました。高野会館の東側にはかつて公立志津川病院がありましたが、すでに解体されてしまいました。防災対策庁舎の行く末もはっきりしない今、高野会館は、震災時の記憶を後世に残す志津川の学びの場として、津波を風化させない象徴的存在になっています。

語り部さんからは、一度津波を経験したことがあるはずの高齢者のほうが結果的に助からなかったという話を聞きました。すなわち、過去の経験から津波の被害を甘く見積もり、結果的に避難が遅れてしまったのは、本来津波の恐ろしさを知っているはずの世代だったとのことです。このエピソードから、自然災害は人間の予想を簡単に超えることがあり、決して自分の思い込みで行動してはいけないと言えます。

街を壊滅させた津波ですが、語り部さん曰く悪いことばかりではなかったそうです。津波が海底のヘドロをまとめて洗い流したため、牡蠣などの海産物が震災前よりも豊富に取れるようになったとのことでした。結局、人間は自然に生かされているのだと感じる瞬間でした。

高野会館の周りは土地の嵩上げが進み、商店などが入る計画になっています。しかし、一度被災した土地に人が戻るのは難しいだろうというのが地元住民の声でした。行政と住民の足並みが揃わないのは志津川地区だけの事例ではありませんが、次々と目の前で造成されていく土地を目の当たりにすると、一層非常に複雑な思いになるのでした。

▲津波で破壊された天井

▲高野会館の看板

▼津波は４階まで押し寄せた

▼地震と津波に耐えた建物外観

▼屋上から志津川湾を見渡す。嵩上げ工事の様子が見える

▲屋上から西側を見渡す。画面右に気仙沼線志津川駅があった

▼屋上から北部を見渡す。街の繁華街があった場所は空き地になっている

●小野花匠園

南三陸町歌津地区で農家を営む小野花匠園は、震災後に設立された会社です。震災後に残された土地と仕事を失った人々を集め、トマト栽培に着手したのが始まりです。現在も農業ボランティアを受け入れながら、地元の雇用促進や農産物のPRに努めています。

私もボランティアの体験で1日お邪魔し、畑仕事を手伝いました。そこで社長から教えてもらったのが、被災地にとって最大の復興支援は、観光でもボランティアでも理由はともあれ、とにかく東北に足を運んでもらうことだ、ということでした。特にボランティアは震災から時間が経つに連れて大幅に減少しており、人出が必要な農業では深刻な問題であると聞かされました。

次の世代を担う新しい雇用の発掘と人材育成についても苦労されているようでした。一朝一夕でその技術を学ぶことが難しい農業は、本人のやる気以外にセンスによるところも多く、なかなか定着しづらい現実を知らされました。今後も雇用を継続するためには、東北産の農産物を購入することが一番の支援になります。

▲▼ボランティアでお世話になった小野花匠園の様子

気仙沼市

宮城県最北端に位置する気仙沼市も津波による大打撃を受けました。死者1000人以上、行方不明者200名以上にのぼり、津波によって流出した石油による市街地火災はマスメディアに繰り返し報道されました。現在は土地区画整備や集団移転が行われている真っ最中です。

●気仙沼向陽高等学校

地元の県立高校として海岸線近くに位置する学校で、教職員らの適切な判断により170名近くの生徒と教職員、さらに地元住民の命が助かった現場です。津波は校舎4階まで浸水しましたが、校舎内に残っていた人々は屋上へ逃げて助かりました。また教職員らの誘導で事前に高台に逃げていた生徒らも無事でした。津波来襲までの約40分の間、迅速な情報収集と正しい判断のおかげで、被害を最小限に防げた例と言えます。その背景には、もともと海岸近くに立地しているという危機管理意識があったことが大きいと考えられます。

現在校舎の周りは更地化されていますが、校舎自体は気仙沼市によって震災遺構として保存されることが決まっています。そのため、私が訪れた際には校舎内にまだ瓦礫が撤去されず残っている状態でした。校舎の間に引っかかった自動車や、教室にあったであろう教材が積み上がったまの光景は、震災当時を思い起こさせる生々しいものでした。校舎の外壁には漂流物が衝突した痕跡が残され、津波の力を伝えています。

▲気仙沼向陽高等学校の外観。外壁に漂流物がぶつかった跡が見える

▲校舎の隙間に残された自動車

▼水没した教材が残されていた

▼鉄道時代の大谷海岸駅のホーム跡

▼BRT 化した大谷海岸駅の駅舎

●大谷海岸駅

気仙沼線の中でも最も海岸近くを走る区間で、多くの堤防・橋梁が流出しました。現在この区間はバス・ラピッド・トランジット（BRT）によって仮復旧されており、元々鉄道駅があった付近にバス停が設置されています。そのため、一部供用可能な部分を除き、線路は駅跡を含めて放置されているのが現状です。地元自治体は鉄道による本復旧を求めていますが、現在手付かずとなっている鉄道施設の復旧には相当の費用と時間がかかると見られ、完全復興にはまだ時間がかかると考えられます。

●小泉小学校

陸前小泉駅にほど近い高台に位置する小学校から小泉地区を見下ろしました。学校からは津波で削られた山の跡と気仙沼線の高架橋を望むことができました。死者40人、行方不明者1800人以上の被害を受けたこの地区で、ようやく道路は復旧したものの、あたりに広がる平地にはまだまだ人が住める状態でないことが感じ取られました。

▼小泉小学校から小泉地区を見下ろす。重機とトラックが行き交っていた

震災後の宮城県を訪れていて常に頭の中に思い浮かんでいたのは、阪神淡路大震災後の神戸との比較でした。兵庫出身の私は間接的ながら震災を体験していましたので、神戸三宮の街が復興していく様子をどうしても重ねてしまいます。神戸の場合、被害を受けたのが関西の主要都市だったため、街の復興や復興住宅の建設は比較的早かったように感じます。

ところが、東日本大震災の場合は津波による被害が重なっており、瓦礫を片付けた跡地にそのまま再建というわけにいかないのがボトルネックになっていると感じられます。震災から丸4年が経った今も避難生活を余儀なくされている人々がいることは、私にとって大変ショックでした。

残念なことに、震災関連の報道は日に日に減っています。未だに衣食住に不自由している人々がいること、雇用が元通りに戻っていないこと、そして震災の象徴である建物が保存の危機に瀕していることはあまり知られていないと考えられます。本書で訪れたのは被災地のごく一部ではありますが、マスメディアで取り上げられない現地の様子と地元の声を盛り込んだつもりです。ぜひこの現状を多くの方に知ってもらいたいと思います。

そして、もし支援したいという気持ちを持たれたのであれば、ぜひ現地を訪れてみてください。私がボランティア中に教えてもらったことは、その土地を訪ね、食事や宿泊で地元に貢献し、地元の人々とコミュニケーションをとり、その体験を共有することが地元にとって何よりの助けになります。本書をきっかけに東北を訪れる方が一人でも増えれば幸いです。

南三陸より　報道では見えない現地の今

発行日	2015年5月2日 （COMIC1★9）
発行者	北近畿5号
サークル	おふとんぱらだいす。
E-mail	kita2.kukuri@gmail.com
Web	http://ameblo.jp/ofu-para/
Twitter	@kita2oyaji
印刷所	サークルK

無断転載・無断複製を禁じます
おふとんぱらだいす。 2015
Copyright © 2015 Ofuton Paradise All Rights Reserved.